

しかし、元田の自然はかまう度へてきている。道筋をはじめ、集落、水田、山野の姿、対岸竹、原の山崩れ、井崎川の護岸工事など、もし百年前の人々が生きていてこの姿を見たら、どんな感概にふけることだろ？

(へへべく)

## 研究

## 「徐文長文集」について

羽柴弘

## 一明石秋室の叢書した本

九州大学の上尾助教授は、去る七月、私に四冊の本をお貸し下さつた。それがこの本である。

開いて見たら和書ではなく、中国の漢文の、木版印刷本であつた。一瞬、私は「佐伯文庫」本ではないかと思つたが、どこにも佐伯文庫の捺印がなく、そのかわりに明石如磨寄贈の朱印が、低く押され、表紙裏に小判型の「九州帝国大学図書館」の藏書印があり、「昭和十九年三月三十一日、第一六一一九一號」と、登録の文字が書き込まれている。つまりこの四冊の本は、九大図書館の所蔵本で、今春、中島子玉と明石秋室について調査にこられた上尾先生が、闇達深いこの本を、格別のお評りいで貸して下さつたものである。

この四冊の「徐文長文集」は、お隣り中国の本版本で、印刷文字面はきわめて鮮麗であるが、惜しいことに用紙が薄く、すぐ折目がきれて、いところかかなり多く、ページをめくるのに少々苦労した。

重ねて言つて全部漢文、訓点(返り点送りがな)の全くない、いわゆる白文である。たとえば、第一冊のはじめに出てゐる徐文長の伝記の冒頭はこうである。

徐渭字文長山陰人幼孤性急警敏九歲能屬文  
私は、乏しきをかえり及ず、こう読んで見た。  
徐渭(ジョイ)字文長、山陰人なり。幼ニシテ孤、性急  
エテ警敏、九歲能文(ヲ)属ス

内容は悉く詩文である。四言・五言・七言の古詩・律詩

・律・絶句と、大部分は詩であるが、なお若干の贊銘・記・碑・伝・墓誌銘・祭文などに及び、徐文長の代表的詩文を網羅していると見た。

私見、そこで鶴城高校の図書館に出来て人名辞典や中国文学史などによつて、徐文長についてしばらく見て見つか、要約すると、次のようである。

徐渭(ヘイニー(一五九三))

中国、明代の文人、浙江山陰生まれ。字は文長、天地山人、青藤道士と号

し、田水月とも署名した。その学才は幼少の頃から聞こえ、詩は李白・李賀の間、文は蘇軾の流れを汲む。天才超拔、詩文はすぐれ、書画は巧みであつた。總督胡宗憲の幕客となり、兵謀

参考して功あり。著書は「徐文長文集」「李

長吉詩集批注」等二十数種に達す。

ところで、この徐文長の詩文は、今まで私など全く接したことが多く、高校の漢文の本などにも見かけたことはないほど、馴染(ぬせん)ぬいてうすかつた。しかし前記へ側点で示す「李賀(ヘイカ)」は、明石秋室が倒して晚唐の詩人である。依然この文集は私にとって身近なものとなつた。

佐伯藩最高の學識者明石秋室が、その当時、どのような見識のもとに、二百年以上も前の人、明國の徐渭の文字をえらび、どういう手づるでこの中国からの舶載本へ輸入書(ハセキヌヒ)を手に入れたものであろうか。いずれにしても李賀(ヘイカ)秋室のつながりに、私は秋室の面目の譲如

(へび。ペーパーのよみ)

あるものを見えるのである。

しかしながら、標題にかかげた、この「徐文長文集」について、その内容を解説したり紹介する、力もなければ、その余裕もなく、またこうして執筆する本音でない。

この本は、今がら三十年程前の昭和十九年の春、朝石家から北大（當時九州帝国大学）に寄贈されたものである。

このようす程度の高い図書は、専門家に死蔵するより、北大の図書館にあの方がおしる所を得ていて、中国文学研究に大いに役立てることが出来る。明石家の当時の寄贈措置は、まことによいことであつた。

この「文集」の中の二、三の詩文に、まるではじめから印刷されたよう、きれいに訓点が施されてゐる。恐らく秋室が書き入れたものであらう。なつかしみながらそれだけ従つて読んで見たが、内容はたやすくわかるものではない。恐らく他のすべては、白文のまま読んでいたのであろう。

それから、冊子を立て置いてみて驚いた。本の手前小口に夥しい付箋の跡がある。和紙の小片をきれいに切つたものであるが、もうよじれて半ばは切れている。秋室自身がいつも座右に置いて、必要を個所を求めてはペテジきめくつていた跡跡である。昔の人々、体裁で本を硝子戸棚に並べる今のへ達とちがい、日夜愛用のため本を身近に置いていたのである。

徐文長の時代は、明朝も末近く、我が国では永禄から天正にかけての戦国時代、争乱で明け暮れていった頃であった。唐宋の文學華やかな時とちがい、明朝も終りに近いころの徐文長の詩文を、さうに二百数十年後の秋室が浮んでるといふ。まことに文学は時代の流れに超越、延の隔たりに問題はなく、秋室のお蔭で今私どもは

このように学ぶことが出来る。  
上尾九太助教授からば、別掲のように依伯史談会は多額のご寄付まで頂いている。このようすに物心両面から、月日かにはなれな佐伯の私どもを顧みて下さつたことを心から感謝するものである。  
（おわり）

### 探訪記

#### 上直見・富尾神社の秋祭り

##### — 豊穣感謝の神駕わいを見て —

九月十四日午後、直川村上直見に鎮座する、富尾神社の秋祭りがある。秋踊りなどの奉納がある。見に来てくれないか——と休石会員から連絡があり、また地区の代表の方からもご案内状が届いた。そこで当日、高木会長と青田氏、それば私と三人で出かけた。

この上直見地区下及駄切神社（久留須、川又、竹下、向船場、園の氏神）と

富尾神社（中津留、河内、間瀬の氏神）の両社があり、集落はどちらとも散ばつてゐるが、昔から人々の氣風も生業も共通し、神社の祭礼はとても時期も前後し、ことは奉納する秋踊りの趣も殆んど同じという。

当節及神社の祭礼、神駕わいも皆ほどではなくなり、民俗芸能である。

お獅子舞や秋踊りなどさびれる一方であった。

このことをねがいを両社の氏子総代の方々が詰合ひ、幸い、神駕わい行事が共通してると

これから、打つてつぱり一年交代で秋踊りなどと両社で奉納しようということになり、

昨年から發足してます附切社で行ない、今年

が富尾神社の番だという。

古びんと村の文化財、民謡芸能とてつぱりも保存しめうといふことと、かつちうした秋踊りの保存会も出来てゐるといふから、たゞ夫々のである。会長は大畠一善氏である。

